小島直記伝記文学全集

伝記文学全集

第九巻

島崎藤村

中央公論社

苏工业学院图书馆
藏书章

小島直記伝記文学全集　第九巻

定価　三八〇〇円

昭和六十二年　六　月　十　日印刷
昭和六十二年　六　月二十日発行

著　者　小島直記
発行者　嶋中鵬二
印刷者　小林　清

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替　東京二一三四
©一九八七　検印廃止
ISBN4-12-402589-0

小島直記伝記文学全集　第九巻　目次

異端の言説・石橋湛山

プロローグ　11

第一章　仏門の子　15

ケインジアン湛山　孤独な少年　秀才ケインズ
二度の落第　校長大島正健

第二章　早稲田大学　39

一高受験失敗　早稲田の学風　プラグマティスト田中王堂　哲学科首席卒業

第三章　入営まで　59

島村抱月・小杉天外の就職斡旋　東京毎日新聞社入社　退社、文筆生活　好遇された軍隊生活

第四章　東洋経済新報社　73

経済雑誌の成りたち　社の先人たち　『東洋時論』　最初の言論活動

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第五章　経済記者への自己改造　89
結婚　自己改造の努力　経済学者ケインズ
『平和の経済的結果』
第六章　民主政治論　109
『東洋経済新報』編集室　言論の二本柱　民衆に選挙権を与えよ　多忙な記者生活　憲法改正辞すべきにあらず　大隈首相の誤れる君権論　両院制・閥族批判　米騒動　平民宰相・原敬　普選要求デモ　原の死、山県の死　治安維持法体制
第七章　小日本主義　173
満州放棄論　我に移民の要なし　第一次大戦、反戦論の展開　二十一ヵ条要求問題　大戦の齎せる思想の変化　ソ連過激派を援助せよ　小日本主義論
第八章　金解禁論争　223
四人の論客　最初の財政官・由利公正　一両一円　大隈から松方へ　松方財政　金本位制の確立　金解禁の時期をめぐって　蔵相・井上準

之助　解禁の問題点　輿論がまちがっている
カッセル教授の日本為替論　ジェノア国際経済会議　ケインズ『貨幣改革論』

第九章　不況の嵐——金解禁実施

鈴木商店倒産　金融恐慌　三日間の乗りきり
池田成彬の欧米視察　金解禁で景気はよくなるか
井上蔵相への疑問提出　消費節約方針批判　井上蔵相、節約論全国行脚　黙殺された執拗な警告
官吏減俸案　楽観と無知　金解禁、遂に実施
崩れる楽観論　鐘紡争議　浜口首相襲撃事件
井上蔵相の強気独走　ドル買いは国賊　金再禁止、本格的地すべりの始まり

第十章　戦争と自由主義者

風圧に抗して　電力国家管理問題　満蒙問題解決の根本方針如何　中国侵略は果して帝国主義戦争か　言論を絶対自由ならしむるほか思想を善導する方法は無い　軍部への直言　天皇機関説真に非常時来る　圧迫下の軍部批判戦術　日蓮の覚悟と意気を持て　雑誌はつぶさぬ、筆は曲げぬ　まず棄てるべきは兵　全文削除、厳重注意

東洋経済新報への圧迫　次男和彦の戦死　「戦後」への準備

第十一章　首相への道　525

インフレ論実践のために　政界出馬、蔵相就任
突然の公職追放　追放生活　「鳩山総裁」をめぐって　揺れる自由党　鳩山内閣通産大臣
二ヵ月の石橋内閣

エピローグ　579

あとがき　595

小島直記伝記文学全集

第九巻

異端の言説・石橋湛山

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

異端の言説・石橋湛山

プロローグ

石橋湛山は、どういう人であったか？

それはこの物語全篇で語ろうとするところだが、世人の記憶に残るのは、その進退のいさぎよさ、ということではあるまいか。

「ロッキード選挙」といわれた昭和五十一年（一九七六）十二月五日の総選挙のあとも、たとえば清水幾太郎は、新聞の時評[1]でそのことをとり上げたのである。

それは、首相三木武夫の政権執着についての論評で、

「或る消息通にいわせると、もし或る時期に三木首相が綺麗に身を引いていたら、その進退を潔いと感じる有権者が多く出て、ロッキード事件があっても、自由民主党は大敗を喫しないで済んだであろうという。なるほど、そういうものかも知れぬ。

政治家の進退の模範といえば、十目の視るところ、石橋湛山と相場が決っている。約二十年前の昭和三十二年二月二十三日、成立後六十三日で、彼は内閣を投げ出した。二十二日夜、医師から二カ月間の静養を勧められたというだけで、必ずしも乗り切れぬ事態ではなかったのに、辞職に反対する人々が周囲にいたのに、彼は『石橋親書』を残して、直ちに台閣を去った」

というものである。

湛山の首相辞職のことが強く国民に印象づけられたのは、その首相になるまでの経緯がとくに国民の注目を浴びていたからである。

日ソ復交と日本の国連加盟をなしとげて、首相鳩山一郎が引退を表明したとき、後継者の問題――自由民主党の総裁となり、首相の座にだれがつくか、その問題が国民の前に大きく浮び上がった。

鳩山のつぎに位するナンバー2は緒方竹虎であったが、その緒方は、三十年十一月、鳩山のひきいる民主党と、吉田茂のあとをうけた緒方のひきいる自由党とが合同し、自由民主党が成立したあと間もなく急死していた。

党規約によると、総裁は公選によって選ばれることになっている。初代総裁鳩山も、形の上では、党大会における選挙で選ばれることになっていたが、対立候補がいなかったから投票は省略されたのである。

ところが、鳩山引退後の総裁候補は三人いた。石橋湛山、石井光次郎、岸信介の三人である。石橋は通産相、石井は総務会長、岸は幹事長であった。

その総裁選は、第十一章「首相への道」でくわしくのべるが、国民の眼には、その戦いのはげしさ、特に実弾（現ナマ）が乱れとんだというスキャンダラスな一面が強くうつっていたのだ。そして投票の結果は、岸一二三票、石橋一五一票、石井一三七票で過半数を占めるものがなく、改めて決選投票となり、わずか七票の差で湛山が勝ち、そのあと、さらに組閣人事で難航したあと、ようやく成立したのが石橋内閣だったのだ。

ところがその一カ月後、湛山は肺炎で倒れた。医師は二カ月の静養をすすめた。

わずか二ヵ月間だけ休んでおれば、ふたたび国政を執ることができる。普通の政治家であれば、そういうことで事態を糊塗し、危機をのり切って、苦労して入手した政権を手放そうとはしなかったであろう。だが湛山はそうではなかった。

このとき、国会では予算が審議されていた。首相としてそこに出席できないということは、責任感の強い彼としてできることではなかった。苦労して手に入れたものであるのに、彼は淡々として辞表を出し、政権の座を離れたのである。

そのいさぎよさが、政治家一般の汚さ、醜さに食傷していた国民の心に、すがすがしい印象をあたえ、喝采を浴びたのだ。

したがって、湛山といえば、すぐこの進退の見事さがおもい出されるが、そもそも彼は、そういう進退の原理原則を、どうやって身につけたのであったか。また、進退は進退として立派なことであるとしても、彼はただそれだけの人だったのだろうか。

進退だけではつくされぬもの、それをたどるのが本書の目的である。

注1　『東京新聞』昭和五十一年十二月十三日号、「時評」欄、「出処進退」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.